

目次

ページ

幹事会	・平成16年度 第2回 幹事会報告	1
特別講演会	・テーマ 人口から見た都市計画研究の課題 発表者 廣島清氏	2
第1回都市計画研究会	・発表者 間野博氏 コメンテーター 松波龍一氏	3、4
第1回都市計画サロン	・中村良三氏	5
会員紹介	・砂本文彦氏	5
委員会紹介	・佐藤委員長、松田副委員長、高井委員長	6、7
編集委員ホットコーナー	・ペルー報告	8、9
今後の活動計画		10
編集後記		10

幹事会(平成16年度 第2回)

日時：平成16(2004)年7月31日(土) 14:00~15:20

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ 研修室B

出席者：支部長 杉恵 副支部長 松波

幹事 大谷、佐藤、高井、廣嶋、松田、山下
オブザーバー 今田(監査役)

委任状提出者 田村、近藤、熊谷

<議題>

- 1 議題1 委員会の委員構成
- 2 議題2 本年度の活動計画：企画・研究委員会、学術委員会、総務委員会
- 3 議題3 全国大会関連事業
- 4 議題4 門田先生追想録編纂会よりの寄付・事業依頼
- 5 その他

<議事>

- 1 議題1 委員会の委員構成
各委員会より委員会構成の説明(幹事会資料を参照)承認。
- 2 議題2 本年度の活動計画：企画・研究委員会、学術委員会、総務委員会
各委員会より本年度の活動計画の説明(幹事会資料を参照)。
- 2-1 企画・研究委員会

<都市計画研究会・講演会・シンポジウム等>

都市計画研究会の第1回、第2回は、日程、テーマが決まっている。第1回は9月11日(土)でテーマは「都心再生 交通そして市街地整備」、第2回は10月30日(土)でテーマは「都心再生とコンパクトシティ」。

第3回については、仮称として「マスタープランに見るコンパクトシティ論」としているが、クリアしなければならない課題もあり、今後、担当委員を中心に内容を煮詰めてもらう。

「中国地方まち並みフォーラム」については、建築学会中国支部中国地方まち並み研究会(都市計画委員会)との共催を承認。日程は今年の11月27日(土)で決定。

広島県建築士会広島支部まちづくり委員会をコアに

検討している「市民参加のまちづくりフォーラム」については、来年の1月15日(土)の開催予定であり、正式要請があれば共催とする。

<地域活動助成>

今年度申し込みは2件ある。

近藤委員(副支部長)より、申請されている「徳島市新町川沿線の都市活性化の見学会と懇談会」は、昨年度の高松市での例のように支部の見学会としても進める。

もう1件(岡山県でのシンポジウム)については、企画・研究委員会の助成担当者で協議し、決定する。

<その他>

会員がフランクに議論することのできる場づくりについては、松波委員(副支部長)を中心に具体化を検討する。テーマ等が決まれば、突然連絡するかも知れないが、そんなスタンスで進めていきたい。

2-2 学術委員会

学術講演会と講演会のすみ分けを考えながら、学術講演会を開催する。

テーマは、「まちの活性化」または「PFIとまちづくり」で検討していく。

開催場所は、できれば広島市以外で行いたい。交通条件を考え、岡山県(市)での開催の方向で準備を進めていく。

澁谷委員や岡山大学などの協力を得て、進めていく。

日程は、他の催しなどを考慮すると、限られており、提案どおり10月16日(土)とする。

2-3 総務委員会

承認。

3 議題3 全国大会関連事業

石丸実行委員長よりの依頼(イベント、ワークショップ)について検討。

4 議題4 門田先生追想録編纂会よりの寄付・事業依頼)学術委員会で受け持ち、事業を検討していく。

5 その他

今年度は、この後、幹事会の予定はないが、メール会議や連絡調整会議で対応していく。(文責：山下)

特別講演会

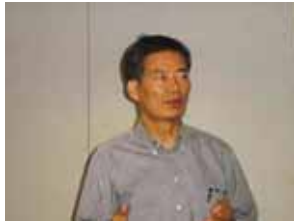
人口から見た都市計画研究の課題

廣島 清志氏(島根大学法文学部 教授)

日時: 2004年7月31日(土) 15:30~17:00

会場: 広島市まちづくり市民交流プラザ 研修室B

この講演は、1996年までの23年間、厚生省人口問題研究所(当時)で、人口と都市計画の結びつきについて研究してきた成果を中心として紹介するものである。



<講演の概要>

1. 少子化と都市環境

(1) 人口流動から見た都市環境の変化

-青年人口と中年人口の変動-

東京都区・市別人口の人口流動を、学生層の属する青年人口変化率¹と、子育て初期の属する中年人口変化率²に基づいて分析した。1985~1990年の5年間では(以下単に1990年という)、都心3区(中央区、港区、千代田区)の青年人口の流入が多く、中年人口は郊外へ流出傾向にあったが、1995~2000年では(以下単に2000年という)、青年人口、中年人口ともに流入傾向にあり、都心へ回帰している。

¹青年人口変化率=t年15-19歳人口/t-5年10-14歳人口

²中年人口変化率=t年35-39歳人口/t-5年30-34歳人口

(2) 住宅ストックから見た都市環境の変化

-持家割合と単独世帯割合(ストック)-

学生層の流入が多い豊島区、中野区などでは単独世帯割合が高く、持家割合は低い。郊外では逆転の現象で、この傾向はここ10年大きな変化はない。

(3) ライフスタイルから見た都市環境の変化

-中年人口変動と女子有配偶者率-

1990年では中年人口変化率と女子有配偶者率は正の相関関係にあり、結婚や出産に伴い女性が郊外へ出ていく傾向を示していた。しかし2000年ではその傾向は崩れ、特に都心3区では郊外への流出が減少し、都心でも結婚、出産、子育てが行われるようになった。同様な傾向は、夫婦出生率、夫婦当たり子供数からも明らかである。また持家割合と夫婦当たり子供数は、1990年は正の相関があったが、2000年ではその傾向が崩れ、居住形態が変化している。

このように、結婚、出生などフローの発生する場合は、近年大きく変化している。これは、子供を生み、育てられる環境は、以前より高密度環境へシフトしたものと考えられ、出生行動に一層、負の影響が出るものと考えられる。

2. 住環境が子育てに与える影響

(1) 戸外遊び環境と共同住宅

戸外遊び環境評価³は、公団・公営の中層住宅団地など計画的に設計された「3階以上共同住宅複数棟」に住む人で高い傾向にある。これは単に意識内の問題に留まることなく、その評価の低い人は、高い人に比べて事故経験率が高くなっている。またその評価は、自宅前の自動車交通量、道路幅員、歩車分離形態にも左右されている。

³「自宅の近所で安心してお子さんを遊ばせておけますか」という質問に対する4段階評価

(2) 戸外遊び環境と戸外遊び

戸外遊び環境と戸外遊び時間は相関関係があり、戸外遊び評価が高い人ほど戸外遊び時間が長い。また年齢の上昇に伴い行動圏が広がるが、親の意識では、未就学児の場合には、自宅から数十メートルの範囲で遊べる環境が望ましいと考えている。

また戸外遊び環境とテレビ視聴は、強い代替関係にあり、戸外環境が悪いとより多くの子供がテレビ視聴に依存している。

(2) 戸外遊び環境と健康度

戸外環境は幼児の発育・成長度や健康の程度に影響している。遊び時間が長いほど健康度は高い傾向にあるが、これは高年齢の未就学児で顕著である。

また戸外遊び環境と幼児の健康度には、相関関係があり、より良い戸外遊び環境ではより健康度が高くなっている。

(3) 戸外遊び環境と育児行動・出生行動

戸外遊び環境は、育児行動や出生行動にも影響を与えている。戸外遊び環境と予定子供数を見ると、戸外遊び環境が悪いほど子供数が少ない傾向にある。特に母親が就業している核家族では、子供数の少なさが顕著である。

近年の地価下落により、都心部に住めるようになってきたが、戸外遊び環境の充実を図ることが我が国の持続可能性の面では重要な課題といえる。

<感想>

出生率は、1971年の2.16から2003年には4割減の1.29となり、少子化に歯止めはかかりません。今回の廣島先生のご講演は、この人口問題に関して都市環境の視点から研究された成果をご紹介いただきました。少子化、高齢化、そして人口減少という大きな転換期を迎える中、都市計画に携わる我々が、何をすべきか議論していく必要性を感じました。

なお廣島先生の詳しいプロフィールは、ニュースレター第3号「会員紹介」にありますのでご覧ください。

(文責 周藤)

第1回都市計画研究会

テーマ「都心再生 交通そして市街地整備」

発表者 間野 博(県立広島女子大学生生活科学部教授)

コメンテーター 松波龍一(株松波計画事務所)

これまで「都心再生」のテーマで二カ年、合計8回の研究会を続けてきたが、今年度第1回目に改めて、まとめの議論をするものです。レポーターは、間野委員、コメンテーターは松波委員で最後に会場参加者の活発な意見交換が行われました。まず、間野委員から次のまとめがされるとともに今後の議論のための議題提案が行われました。

1、始めに

- 都心再生の対象、広島都心部は、現在のところ健全である。むしろ広島以外に関心があるのではないかとするとテーマは「都心」というより「中心市街地」のほうが良いと考えられる。



- 「再生」ということは「死んだ」ということではなくて「再び生き生きとすること」であり健康な状態にすることである。「中心市街地」の再生は必要なことであるか。あるとしたらだれにとって必要なのか。市民は現在郊外のショッピングセンターで充分満足しており市民にとっていらぬとも考えられる。
- 「中心市街地の活性化」が必要ならばどうしているのか、活性化できるのかが大きなテーマである。

2、国土・地域構造と都市

- 今後「中心市街地」の都市間競争がおこなわれ都市が淘汰される時代に入ってくると考えられる。
- 国全体でみると今後人口の減少と経済構造の変化が出てきて、都市空間、商業供給は過剰となり、今ある都市が存続するか、再び生き延びられるのかが課題である。「中心市街地」とは勝つ都市を研究するのか。また、淘汰されても良い都市といけない都市があると考えられる。

3、構造の中の中心市街地

- 現在、「中心市街地」から、人口・商業でなく、事務所も郊外に転出しており、中心部の空洞化が進んでいる。現在では、郊外と郊外の連携が進んでいるので中心市街地は要らなくなっているのが現状ではないか。中心地の都市機能が弱体化し求心的な動きが減少していると考えられる。また、「中心市街地」は要るのか、商店街が市民にとっていいのか明確にする必要がある。
- 「都市圏」という概念はなくなったのか。自治体ごとの「都市圏」、「中心市街地」を今一度考え直してみる必要がある。中心市街地とそれをとりまく都市住民の関係は希薄になりつつあるのではないかと。映画はA都市、ショッピングはB都市と都市別の帰属意識がなくなりつつある。

- 地区交通システムは様々な提案がされているがヨーロッパの模倣でなく日本独自の交通手段を検討していく必要がある。ドイツで法的に行われているように都心にあるべき商業施設、郊外にあるべき商業施設の棲み分けをどうしていくべきかである。

4、中心市街地自身

- 商業の衰退は、今後も起こると思うが、商店街の活性化の視点は、市民と一致しない場合がある。中心市街地が衰退すると防犯、防災の問題がでてくる。中心市街地は、当事者が高齢化し、店舗は老朽化している状況にある。「中心市街地活性化」は計画だおれとなっているのが現実であり、計画のプロセスが重視されている問題がある。TMOがうまくいっていないし、外国の概念を持ち込んでいるが外国とは違う現実となっている。
- 都市計画、経済、商業、住宅各政策等が関わりどうリンクさせるかがうまくいっていない。12省庁の総合的な施策を有効に使う必要がある。文化・福祉・健康などのネットワークが必要である。病院と市街地と一体となった事例、障害者の拠点施設の設置により関連する人々が集まってくるなど、商店街中心から視点を変える必要がある。

5、討議

以上を受けて、コメンテーターである松波委員から以下の意見が出された。



先程出された都市間競争は今この時代にあった言い方であるか問題が残る。コンパクトシティの考え方は、イギリスでは「歩いて暮らせる街づくり」が都心のあり方となっている。おとなしくて、もっと身近な暮らしやすさを目指している。目指すところは「ハッピーな街」と考え、都市がお互いに勝負して淘汰していくとは違うのではないかと。また、中心市街地活性化は、商店街活性化で終わってしまう悩みを持っていると思うし、TMOは機能していない。体制の作り方、事業の総合性を担保するしくみが都心再生の中でほとんど欠落しているのが重要な論点と思われる。

次に参加者の意見交換が求められた。

- 都心と中心市街地 -

- 都心は経済圏を担っている。一般的な都市は、生活圏をもち、暮らしやすさからみて中心市街地の意味が問われている。ガバナンス的な体制でやらないと商業政策だけでは答えが出ないのが地方都市である。
- 広島の都心は、産業、文化のコアとして機能している。経済、文化を含めてリードしているのが都心であり、プランニング的にはこれまでやってきた空間、交通政策をグレードアップする方法論は何か問われている。
- 1、2年後、10年後はこうあってほしいと段階的に考えていかないと都市機能の充実、十分なサービスはできない。住み替えをコーディネートする機関があれば

よい社会制度であり都心活性化のキーワードとなる。

- ・ 広島市の場合と三次市、呉市等人口が減った場合どうなるかは事情が違ふと考えられる。人口が半分になった時「歩いて暮らせる中心市街地」を持った都市は成り立っていくのか。歴史的な町並みを持ち、普通の生活ができて街が継続している状態を築く必要がある。広島の都心よりむしろ広島以外の地方都市が問題をかかえており、広島の都心をどうするかとは戦略が違ふと考えられる。

- 中心市街地の必要性 -

- ・ 倉敷の中心市街地の活性化を考えたとき当該地区しか見ていないので広域的な視点で見る必要がある。商圈活動が拡がり、人の選択の自由が増えている。その時の交通形態、生活形態が変わっているのも一つのところにしばりつけることは出来ない。現在市町村合併が行われているが、合併すると中心市街地はたぶん淘汰されていくであろう。中心市街地は違う場所になってもいいのではないか。都市圏は大きい目でみて、行動がどうなっているのか、広い目でみて町並みを考える必要がある。
- ・ 中心市街地はいるのかどうか。歴史的からできた中心市街地はドライな価値以上のものがある。門前町であったり、かぐら坂商店街のように神社があったから活性化している。市街地が3代続くと価値が変わり、今の機能的なものを抱え込んでいるのでつづすかどうか議論する必要がある。
- ・ 中心市街地が要るかどうか、後継者がいない、日々の生活に困っていない、ほっといて欲しいのが現実である。また、最初から計画だおれでよい、やるつもりはないとは思いますが、だれも中心市街地は要らないとはいえないジレンマがある。

- 精神的なシンボル -

- ・ 島根県K町で中心市街地のプロポがあった。この時住宅地を中心とした現状からみて商活動の賑わいづくりには無理を感じた。求められる中心市街地とは「精神的なシンボル」と考えられる。なくては困るが今までの概念の中心市街地はいらない。
- ・ 市町村合併したら中心市街地がいなくなるのではなく、役割分担として地元には必要なものである。
- ・ 市街地が連たんしてきて近隣の魅力がなくなっている。市町村の合併が進むと賑わいがどうなっていくのか。精神的なシンボルを残していきたいものである。病院、郵便局、警察等を中心地に混在させると人が集まってくる。商店街だけでは魅力がない。公共交通機関が発達しても都心の魅力がないと人は集まらない。ヨーロッパの都心部のように、行って楽しい、歩いて楽しい街づくりをする必要がある。ウインドウショッピング等多様性のある魅力作りをする必要がある。

- ・ 安芸区は過疎地である。病院がなくなって遠くまで行く必要があり生活圏が広がった。商業は縮小するが公共施設はそこに置いておく必要がある。
- ・ 都心は楽しくして、驚き、興奮、芸能人に会うかもしれないなどの仕掛けが必要である。
- ・ 中心市街地を担う人が大切である。中心地しかないもの、人に会えるサービスがある、なにかがあり、人が集まってくる中心地が必要である。人が行ってみたくなる所が中心市街地であり、人が行きたくなるのは「求心市街地」である。

- 回遊性と総合制度 -

- ・ 広島都心は、回遊性と路面店である。本通りの人がぐるぐる回れる回遊性の街づくりを考えている。そのためには、店舗の連続性が不可欠である。広島のカキ船かなわ、三次の鮎の店等地域の食材を使った街づくりは中心市街地として残していける。
- ・ 都心の問題は、総合政策である。経済、交通、観光、住宅政策でやっていかないとうまくいかない。広島は水辺の都市であり、また、夜に人が減ると寂しい。今後は、都心居住を進めていく必要がある。商店街の背後には、マンションがあるような魅力的な都市づくりをする必要がある。今後、都心部に福祉政策、医療施設が整備されていると都心の魅力が増幅される。交通は、公共空間で何かができるが民有地にできる施策がないのでがんばる必要がある。

最後に松波委員から、都心、中心市街地は、商業だけでなく多様な生活サービスを考えなければならないということ再認識であった。都心の魅力の育成が重要であり、他でやっていない、人をつくる、コミュニティをつくるのが重要であるとまとめられた。

感想

議論については紙面上すべてを記録することが出来ず割愛させていただきました。

議題は、広島市都心から中山間地域の町の再生まで、議論がなされ議題内容が広く、どこの都心再生をイメージされているか様々であったように思います。

都心再生としての広島市は、現在の道路交通網の整備により大竹から呉までの広島都市圏の都心として機能し賑わいがあるが、むしろ地方都市である呉市、大竹市等の中心市街地の活性化に課題があると考えます。さらに加えて中山間地域の町、村が合併等により賑わいがなくなっていくのが課題です。

都心再生は、商業中心とした考えではなく、市民全体の課題としてとらえ、とくに、歴史的文化的重要な地域は、「人と人のふれあい」



「歩いて暮らせる街づくり」のためにも、今後とも様々な施策と人づくりによって活性化させる努力が必要と考えます。

(文責 上之)

第1回 都市計画サロン

日時：2004年9月30日(木)、18:30~21:00

場所：広島地下街開発株会議室

ゲストスピーカー：中村良三

(広島高速交通株・広島地下街開発株社長)

参加者：松波(進行者)、上之、佐藤、馬場、林、藤岡、松田、間野、山下、吉原

話題提供の骨子

広島は大変住みやすい街。様々な可能性を持った街。

広島都心は、“大きな広場の中にある”として捉え、職住遊の機能を高密度に集積させ、「歩いて暮らせる街」を創ることで大きな複合開発(MXD)を目指す。車社会からの脱皮、公共交通をベースにした社会の実現。そのためには公共交通機関のネットワークが必要、公共交通の割高感の解消も。道路特定財源の交通財源化が鍵を握る。

サービス産業(4次産業)主体のまちづくり。“情報”と“遊”の視点の大切さ。

様々な情報提供手段の確保。巨大スクリーン、インターネット端末、フリーペーパー、タウン誌...

“遊”と結合した公共交通機関を育てる。“遊”の施設(イベント時)を回遊する無料バス...

街の中にホテルのコンセルジュ(執事)のサービスに相当する仕組みを創る。

市民参加のイベント・祭り、演劇、美術館)、2つのプロスポーツ球団等をさらに市民、街と融合させる。歓楽街を再評価。同時に、暴力と犯罪のない街に。

市民の日常生活の中に、瀬戸内海はほとんど存在しない。周辺の島々とのつながりを都市計画の中に位置づける。海、海岸線を“遊”の面からも検討。

アストラムラインは自転車と電車のパーク&ライドの先進事例。“遊”を絡めた自転車のあり方を検討。

多摩ニュータウンの“失敗”に学ぶ。年齢構成という時間軸も加味したMXDの構築。

広島はこれからの都市モデルとなるポテンシャルがある。

都市のネットワークが大切となる(道州制よりも)。

感想

話題提供そしてその後のディスカッション、とても密度の濃い内容でした。参加しないと聞けない話も。紙面の制約と言うことで。(文責：山下)



会員紹介

砂本文彦(すなもとふみひこ) 広島国際大学社会環境科学部建築創造学科 講師



1972年広島県呉市生まれ/1992年呉高専建築学科卒業/1995年豊橋技術科学大学卒業/1997年同大学大学院修士課程修了/1997年高知工科大社会システム工学科助手/2000年呉高専環境都市工学科、建築学科助手/2001年博士(工学)/2002年以降、現職。

11月13~14日の学術研究論文発表会実行委員と学術委員 現在、都市計画学会関連の仕事としましては、当方が所属しております広島国際大学で開催される、都市計画学会学術研究論文発表会の実行委員として会場運営、HPの管理等を担当しております。皆様のお越しをお待ちしています。また、本大会の連絡調整役も兼ねて昨年度から来年度まで学術委員として大会学術研究論文、一般研究論文の審査取りまとめもしています。勉強になることが多いのですが、苦勞も想像以上に多く悪戦苦闘の日々です。当方は、主に審査論文は建築学会に投稿しており、一度だけ都市計画学会に投稿しました。その際、何気なく受けた審査の過程がこの様に公平性を保つために複雑でしかも厳正なことになっていたのかと、改めて感心した次第です。

こうした比較的地味な学会活動を通じて思うのは、これらの作業の目標や工程は、規定(期日)が決まっています機械的に進行しなければなりません。しかし、そんな中でも見えないような部分に細かなアイデアを潜めていくことや、反対に普遍的、永続的になればシステムチックな観点を織り込んでいくことにちょっとした快感があるような気がします。その点は研究活動、論文執筆やまちづくりと似ているのでしょうか? 都市計画学会の仕事のため余計にそう感じます。

研究活動

専門分野は一言で言えば、日本近代都市・建築史です。主に日本近代の国際リゾート地開発、国際観光ホテルの建築について調べていました。近年小泉内閣が進めている国際観光政策は皆さんご存じでしょうが、実は1930年代にも日本政府は似たことをして、西洋人の趣向性を反映した施設整備を構想し、全国に国際リゾート地が建設されました。結局は戦況の悪化でほとんど使われることのないまま歴史の間に消えていました。この中四国地域に該当するリゾート地はありませんが、あえて言うならば大阪・神戸と別府を移動する瀬戸内海航路の客船からの眺めが、地中海に匹敵する風景として「発見」されて、この風景に対しての積極的な意義付け(=宣伝活動)と船舶の豪華客船化が行われました。最近、当時のアジア地域で形成されたリゾート地が、「大日本帝国」との関係の中でどのような意図と偶然性を持ってリゾート地を形成してきたかを調べています。この先数年は朝鮮半島での展開について調べていくつもりです。本学会では異色の研究だと思います。どうぞ、よろしくお願ひします

委員会紹介

総務委員会の活動紹介

総務委員会の基本的な役割としては、名簿の管理・財政管理、会員への連絡、ホームページの管理など、あまり日の当たらない任務が多く、この程度ならあまり人手を集めることはないなと思っておりました。そこで、何をしたらいいのか模索している折り、ニュースレターを発行(編集長は佐伯氏)することに思い至り、昨年度より実行しています。これは年4回発行し、支部としての活動報告の他、会員紹介などを行うことにより、日頃支部活動に参加される機会が少ない方への情報提供を行う意義を持っていると思っています。

総務委員会のメンバーは9名で、ニュースレターの記事は、分担して執筆しております。活動に対する評価は各人の受け止め方が違いますので、記事は原則として、執筆者の署名記事の形をとっています。委員会は年4回程度開催しておりますが、ニュースレターの分担については効率的にすませ、アルコールの入ったアフターコンベンションを活発に行っています。総務委員会の委員にならなれたいかたは、どうぞお申し出下さい。

委員長は佐藤が務めておりますが、これは支部設立準備会活動において事務局を要請されたことが元になっていきます。通常は、会員連絡の他、本部との事務連絡などが多少あり、雑用係であると任じております。最近ではいろいろな雑務を周りの人に分担してもらっており、色々ご迷惑もおかけしているところです。ともあれ、軌道に乗り始めた支部活動やニュースレターの発行を、ぜひとも継続させていければと思っています。

総務委員会の構成

委員長	佐藤 俊雄(中国地方総合研究センター)
副委員長	山下 和也(地域計画工房)
委員	上之 博文(ヒロコン)
	佐伯 達郎(復建調査設計)
	周藤 浩司(中電技術コンサルタント)
	隅田 誠(ラット環境設計)
	福馬 晶子(広島市都市計画局)
	宮迫 勇次(荒谷建設コンサルタント)
	安永 洋一郎(パシフィックコンサル)

(文責 佐藤)

学術委員会からのお知らせ

学術委員会委員長 高井広行

中国・四国支部の学術委員会は10人の委員で構成されており、その委員会で各種の計画を企画しております。本年の最初の企画は全国大会にてワークショップを開催することです。

ワークショップ題目は「バリアフリーのまちづくりを点検する 広島事例を中心に」ワークショップ内容(案)はワークショップテーマのキーワードを「バリアフリーのまちづくり」とし、広島県下の主要都市(広島市・福山市・呉市・東広島市(予定))におけるバリアフリー・ユニバーサルデザイン等に関する取り組みおよび将来の計画・考え方について紹介していただく。その紹介を通じて広島地区における現状を把握し、現在の問題点と将来の方向性について議論していただく。さらに、議論を全国に広げ、将来のバリアフリーを考慮にしたまちづくりのあり方について検証していきたい。」で現在発表者を選定しております。

さて、次の企画は学術講演会です。今までにも多くの後援会が実施されておりますがほとんど広島市が会場になっておりました。このたびは広島県外および四国の皆様に参加しやすいように岡山を会場として開催したいと考えております。決定しだいお知らせいたします。

- ・日時：12月4日(土)14時：から17時(予定)ごろ
- ・場所：岡山市内
- ・内容：

テーマ案 1. まちの活性化

タウン誌とまちづくり(ソフト的)
活性化対策と計画支援(TMO等)
住民参加のまちづくり

2. PFIとまちづくり

PFIを活用したまちづくり
PFIの事例と活用方法(国土交通省/
行政/・・・)

で開催予定です。ふるってのご参加お待ちしております。

また、故門田広島大学教授追想録編纂会よりご寄付をいただきました。その寄付金で門田先生にふさわしい事業の実施依頼が学術委員会に来ております。

現在その寄付金の使途としましては交通工学に関する講演会がもっともふさわしいのではないかと考えております。その他によりよい事業がありましたら学術委員会までお知らせください。時期は来年度を考えております。

企画・研究委員会活動紹介

都市計画学会中国四国支部の2004年度企画・研究委員会は、杉恵頼寧(広島大学) 委員長の下、松田智仁(広島市) 副委員長、委員に、石井勝則(中国セントラルコンサルタント)

上之博文(ヒロコン)

奥村誠(広島大学)

加藤文教(ヒロコン)

熊谷昌彦(米子工業高等専門学校)

近藤光男(徳島大学)

佐伯達郎(復建調査設計)

佐藤俊雄(中国地方総合研究センター)

渋谷俊彦(山陽学園短期大学)

周藤浩司(中電技術コンサルタント)

隅田誠(ラット環境設計事務所)

田村洋一(山口大学)

塚本俊明(都市環境研究所広島事務所)

福馬晶子(広島市)

藤岡憲三(地域計画工房)

松波龍一(都市環境研究所松波計画事務所)

間野博(広島女子大学)

宮迫勇次(荒谷建設コンサルタント)

安永洋一郎(パシフィックコンサルタンツ中国支社)

山下和也(地域計画工房)

山根公八(福山コンサルタント西日本事業部)

脇田祥尚(広島工業大学)各氏の24人で構成しています。多様な活動を支えるため、広島市内のコンサルタントの方々に数多く就任いただいていることが特徴です。

今年度の委員会活動は、次のとおり多彩です。

都市計画研究会

特定の課題について、講師による動機付けの発表、その後意見交換を展開することにより、学術上、あるいは社会的に必要な課題に対する研究の誘発、取り組み方や方法論の方向付けを行うとともに、共同研究を推進するものです。成果は、ホームページ、ニュースレターを通じて支部会員に報告しています。

今年度は、3回の研究会の開催を予定しています。

第一回都市計画研究会は、9月11日(土)コンフォートホテル広島において、テーマを「都心再生 交通そして市街地整備」とし、昨年まで都心再生のテーマで二カ年合計8回続けてきた研究のまとめの議論を行いました。レポーターは昨年度までの当委員会の委員長である間野委員、コメンテーターを松波委員にお願いし、参加者との意見交換も盛り上がりしました。

第二回研究会は、10月30日(土)15:00~18:00 広島市まちづくり市民交流プラザ5階研修室Cにおいて、名城大学海道清信助教授をお迎えし「都心再生とコンパクトシティ」について研究を深める予定です。是非おこしください。



都市計画研究会風景



講演会風景

第三回については、開催企画案の調整中です。

講演会・シンポジウム・講習会、見学会等

会員の要求する知識や情報、修得したいという要望のある技術や手法、現場などに関して、新たな知見を啓発・普及させることを目的として開催しているものです。これら事業は積極的に他団体との共催などの配慮を行っています。

講演会は、7月31日(土)、島根大学の廣島清志教授をお招きし、「人口から見た都市計画研究の課題」と題してご講演いただきました。この講演会は、広島都市政策研究会(代表広島大学杉恵教授)に共催(資金協力)いただきました。厚く御礼申し上げます。

また、会員がフランクに話すことができるテーマ・場を設定し、会員相互の知識・情報・技術等の交流を促進するという趣旨で、今年度からリレーサロンを始めました。第1回は、9月30日(木)ゲストスピーカーに、会員で広島高速交通株式会社社長、広島地下街開発株式会社社長の中村良三氏をお迎えし、「私の広島論」をお話しいただきました。中村氏の広島への熱いラブコールをおうかがいしました。第2回は調整中です。

見学会は、平成16年11月「徳島市新町川沿線の都市活性化の見学会と懇談会」を調整中です。予定が固まり次第ご案内いたしますのでこちらも多数の参加をお願いいたします。

シンポジウム等については、

11月27日(土)13:00~17:00 広島国際大学国際教育センター200号室において開催されるフォーラム「まち並みはどこへゆく 現場に学ぶ明日への手がかり-」主催:日本建築学会中国支部 中国地方まち並み研究会を、当支部で共催(名義共催)します。東京芸術大学の松山巖氏の基調講演で、入場は先着100名です、多数お運びください。

また、2005年1月15日(土)午後広島市まちづくり市民交流プラザにおいて開催される「ひろしままちづくりフォーラム2005」について、(社)広島県建築士会広島支部まちづくり委員会をコアとする実行委員会に参画(経費・人員分担)して共催する予定です。後日ご案内いたします。

電子会議室試験運用についての研究(継続研究)

インターネットを活用した電子会議室の試験運用を行おうとするものです。本年度は、大学や企業内のLAN環境との共存可能性を探っていく予定です。

地域活動助成

各地域の自主研究会等の活動企画の中から、助成金を支給するものです。中国四国地方の地域の多様性や都市計画研究会開催会場への交通事情などを考慮して企画された制度です。今年度は、次の2件について各3万円の助成を決定しました。

「徳島市新町川沿線の都市活性化の見学会と懇談会」

11月開催(全体調整中)

「定期借地権の普及を目的としたシンポジウムの開催」

平成17年1月(予定)

企画が固まり次第ご案内いたします。

いずれの行事も多数の参加をお待ち申し上げております。

(文責:企画・研究委員会副委員長 松田 智仁)

編集委員ホットコーナー

ペルー報告

夏に「地球の裏側にでも行ってみようかな」と思い立ち、ペルーとボリビアに行ってきました。

行く方法、気候、地形

日本から行く方法は、まず飛行機で北アメリカ(U.S.)に行き、そこからペルーの首都のリマに少し小型の飛行機で飛びます。だいたい成田からペルーまで、25時間かかります。

着いたペルーは、日本が夏ということは地球の裏側ということで冬だったのですが、赤道近くということもあり、暖かいところでした。



ナスカの地上絵



ナスカの大地

ただ、地形としては、リマや地上絵で有名なナスカは海に近い平野ですが、インカ帝国の首都であったクスコやインカ帝国が逃げた先といわれているマチュピチュ、インカの墓やチチカカ湖に浮かぶ葦の島が近くにあるプーノ、やはりチチカカ湖に浮かび、ここからはボリビアになるのですが、インカ帝国の発祥の地といわれる太陽の島、そこに行くために通る夢のように美しい町コパカ



ティワナク遺跡



チチカカ湖と葦ぶね



マチュピチュ遺跡

パーナ、インカよりさらに昔、西暦400年から800年に栄えたティワナク文化の遺跡の町ティワナク、そしてボリビアの首都ラ・パスと、どこも4,000m近い(富士山より高い?)高山となっているため、昼はTシャツ、夜はセーター二枚とウィンドブレーカーでもいうようなまさに「山の天気」です。もちろん、高山ということで、きっちり高山病にもなります。

都市について

勿論、ティワナク文化の時代(西暦400年~800年)インカ文化の時代(11世紀末~15世紀)の遺跡の都市などは、垂涎物なのですが、だいたいまだった遺跡があったに違いないところは、スペイン人がきっちり壊して上に教会を建てているか、資材に流用しているかなので、原型を留めません。辛うじて、そのまま使われている石垣の切り方や組み方の精巧さなどにインカの職人的な文化が見て取れま



石垣と花/マチュピチュ

す。マチュピチュは、さすがなかなか見つからなかった都市だけに、原型を留めています。それにしても、逃亡先で作った都市なのにもかかわらず、切り立った崖の上に1万人も住める都市を作っているところは、見ものです。勿論時間が経っているため、石しか残っていませんが、ピラミッドか祭祀場と思わしき石段、階層による住み分けをしていたと思われる形式の異なる人家、精巧な町の中を細い滝のようにして流れる水路、農村、石で出来たマチュピチュの立体地図など、在りし日のインカ文化の町のよすがを残しています。ただし、色々な人が色々な解説をしていますが、どれも根拠に乏しい想像に過ぎないように聞こえるため、自分で見ながら考える方が楽しいと思われま



アルマス広場/クスコ

また、町から少し離れた村などは、いまだ土レンガで組み立て、木を組み、葦のようなもので屋根を作っています。遺跡と構造が一緒のところを見ると、材料が違うだけで、昔も今も同じ工法なのに違いありません。

チチカカ湖に浮かぶ、葦で出来た島にも人が住んでいるということは人家があるのですが、それも形的には単純な切妻で、やはり遺跡や土レンガの家屋と同じ形式を取っていると考えられます。



葦でできた島と家/チチカカ湖・ウロス島

人家以外では、祭祀場やピラミッドの集合体と考え

られるティワナク遺跡も、3つの世界観を現世に縮図として再現した、壮大な遺跡で、ピラミッド、地下に掘り込んだ空間、中位の大きな台を作った空間で、それぞれ、現世と地上の世、地下の世を示しているようで、巨大な遺跡に身を置くと、現実とは違う世界に移動したのではないかと感じる事ができます。インカなど土着の文化を破壊したスペイン人の都市も、15世紀からの古い町であるところも多く、町割りはインカから変わっていなかったり、広場がインカのものに流用していたりして、インカのよすがを実は残していたりします。(次ページへ)



クスコ、公園を望む

また、スペイン人の建てた建物も、コロニアルスタイルという現地の気候風土に合わせた建築物で、リマでもクスコでも、世界遺産となっています。表は2階建てで、また、階高も同じため、統一された町並みという印象を受けます。隣り合う建物同士はぴったりとくっついているため、隣との間で換気や日照は期待できませんが、建物の中で噴水のある中庭を持ち、口の字型になっていて、自分の建物で日差しを受けることが出来るようになっていきます。日本の町屋も中庭を持っているのですが、やはり町の建物は、形式が決まってくるのだと思います。また、噴水のある中庭というのは、イスラムの文化を引き継いでいるとも考えられるため、異種の文化がそれぞれ影響を及ぼしているなども考えられます。

コパカパーナというチチカカ湖畔の町などは、高山特有の雲のない宇宙のような青空に、白い地中海の建物を思わせる教会が心に沁みる美しさです。インカの時代にも、ここが聖地だったという話なのも頷けます。



コパカパーナ町並み



コパカパーナ

また、リマの都市部で、観光用にされている街では、地先の歩道の半分を占有許可を取って自分の店舗でカフェやレストランに利用できる条例が区単位で施行されているようで、道のあちこちにカフェなどがありました。また、車付の小洒落た物売りも出ていました。



通路の半分をオープンレストランが占めている / リマ

イタリア通り



リマの街路とオープンレストラン / 広島平和大通りと同じ道路構成



クスコの町並み



リマの町並み



クスコの町屋

目抜き通りでは、デザインの規制が働いているようで、紺色のマクドナルドやケンタッキーフライドチキンのテント庇などがありました。世界遺産に登録されていることもあり、伝統的建築物と新しい建築物とのデザインの共生を図っているのだと思われます。



青いマクドナルド



青いケンタッキーフライドチキン

終わりに

しかし、惜しいのは、ティワナクやインカの文化が破壊されており、また、どのような文明を持っていたかということも文字などで残っていないため、出てきた出土品や、民衆の残された風習などで知るしか方法がないようで、植民地時代の西洋人の見事な文化の破壊ぶりに感服します。

また、現地のペルー人やボリビア人は、相変わらず貧乏を余儀なくされているため、都市がほとんどスラムであったり、強盗やぼったくり、子供による物乞いなどが横行しているのも悲しいことです。町も、歩道はほとんど簡単な台や地べたに自分の持っているものを売っている物売りに占拠されていたりします。また、現地の伝統的建築物も、貧乏が元で、朽ち果ててきていたり、一階を日用品を売る商店等に改装したり、強盗が入ってこないように檻を付けたりしているのも惜しいです。



リマのスラム



リマの雑踏

ペルーとボリビアには、ある程度経済的に豊かになっていただき、内紛や強盗などがなくなり、それぞれ自分の文化に誇りを持ち、大事にしていっていただけたら良いなと思います。



昔のクスコ / 模型



ただし、経済的に豊かになっていないから、壊れかけた建物もそのまま残っていることを考えると、日本でどんどん古い建築物が無くなっていくことを思えば、一概には言えないなとも思います。

ぜひ皆さんも、色々な目には遭うとは思いますが、経験だと思って、ペルーに行ってみてください。心を打つ経験が出来ることだと思います。

(報告：福馬晶子 / 編集委員)

今後の活動計画

<第2回都市計画研究会>

日時：2004(平成16)年10月30日(土) 15:00~18:00

会場：広島市まちづくり市民交流プラザ5階研修室C

テーマ：都心再生とコンパクトシティ

講師：海道 清信 先生(名城大学)

<都市計画学会大会前日企画>

日時：2004(平成16)年11月12日(金) 13:30~

見学会「ボンネットバスで行く呉のまち巡り」(定員40名)

集合：13:30 JR 呉駅北口

時間：13:30~16:30

参加費：無料

シンポジウム「公共空間の賑わい利用とまちづくり」

時間：17:00~19:30(見学会の後)

会場：つばき会館文化フロアー(呉市中央6-2-9)

問題提起：倉田 直道(工学院大学)

パネリスト：佐名田 敬荘(広島市)

川越 三正(呉市)

福田 由美子(広島工業大学)

坂本 スエコ(蔵本通り屋台組合長)

終了後、屋台村にて懇親と語り合い

申込先：Eメール c-plan@ccrc.or.jp

詳しくは、日本都市計画学会の会告をご覧ください。

<日本都市計画学会>

「第39回学術研究論文発表会」

日程：2004(平成16)年11月13日(土)~14日(日)

会場：広島国際大学呉キャンパス1・2号館

広島県呉市広古新開5-1-1

大会ホームページ

<http://www.hirokoku-u.ac.jp/ta/cpi/>

学会ホームページ <http://www.soc.nii.ac.jp/cpi/j/>

<フォーラム>

「まち並みはどこへゆく 現場に学ぶ明日への手がかかり」

日時：2004(平成16)年11月27日(土)、13:00~17:00

会場：広島国際大学国際教育センター・200号(広島市中区
幟町1-5)

講師：松山 巖(評論家・作家)

話題提供：和田 嘉宥(米子高専)

地井 昭夫(広島国際大学)

釜谷 幸志(広島市)

東 孝次(山口県)

井手 三千男(写真家)

コーディネーター：石丸 紀興(広島国際大学)

問合せ先：中国地方まち並み研究会事務局

(株)地域計画工房内：山下) TEL:082-293-1460

E-mail:k-yamashita@chiikikb.co.jp

編集後記

今年の夏は猛暑と大型台風という自然の猛威のなかで、人間の無力さを思い知らされました。皆さんは無事夏を乗り切ることができましたでしょうか。被害にあわれたかには謹んでお見舞いを申し上げます。

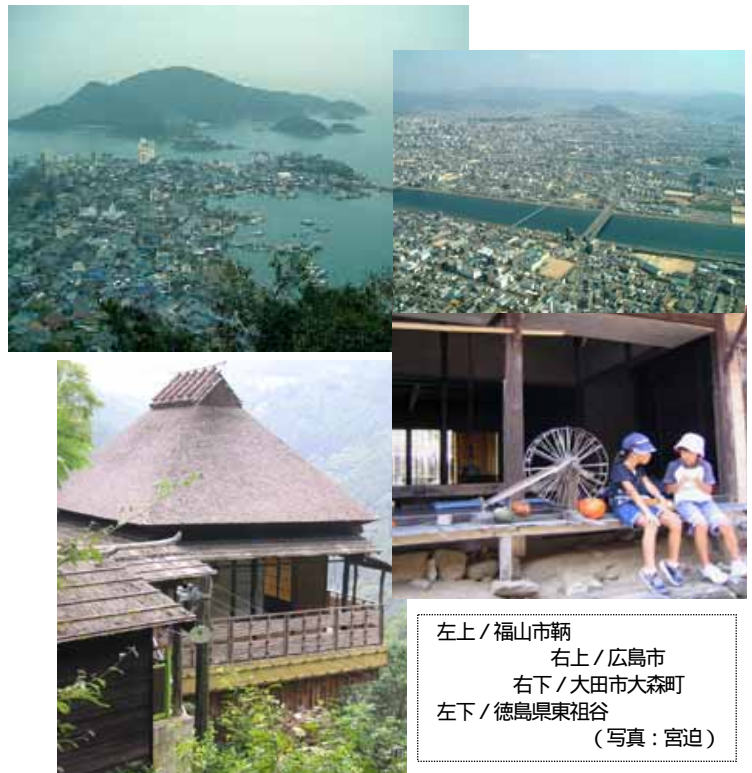
近年の異常気象は、人間による自然破壊に対する自然の反撃かもしれません。「田園は神が創り、人間は都市をつかった」という言葉を聞いたことがあります。都市や建築は過酷な自然環境から人間を守るためにつくられたといえますが、本来都市も自然との調和を欠いては持続するはずはありません。謙虚に見直さなくてはならないような気がします。

一方、私事で恐縮ですが、時々昼休み会社の裏山に上り、広島市内の景色を眺めることがあります。そのとき、総じて建築物の醜さを痛感させられます。その中で、山、川、海が何とかその醜さを補ってくれているように感じます。自然のやわらかい線形に比べ、人工構造物が、機能はともかく「美」という舞台ではまだまだ力量不足であることは明らかです。

去る6月、景観法が公布されました。都市、農漁村の美しい景観形成をめざすものです。

都市計画は、自然の猛威の前でははなはだ微力かも知れませんが。しかし、「美」について、いつまでも無関心ではいられません。先人が残してくれた美しい都市、農漁村の景観も、いつまでも待ってはいてくれません。(佐伯)

編集委員：佐伯達郎(編集長)、上之博文、佐藤俊雄、周藤浩司、隅田誠、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也



左上/福山市
 右上/広島市
 右下/大田市大森町
 左下/徳島県東祖谷
 (写真:宮迫)